

# 子ども目線のランドスケープのすすめ

## —子どもの心身を育むための都市部の水辺づくりをヒントに—

Landscape design for Children -Riverfront design to growing up Children in URBAN AREAS-

土井 康義 *Yasuyoshi DOI*

株式会社 建設技術研究所 東京本社 環境部  
CTI Engineering CO., Ltd.



### はじめに

「あー、楽しかった！また来たいな！！」

「次は足を上げてもっと遠くまで流letたいな！！」

これは都内を流れる落合川へ遊びに行ったとき、小学2年生の息子から聞こえてきたことばである。

これを聞いた私は、本来、水を流すことが目的の河川空間が、子どもの遊び場になること、そして積極性や自主性など、子どもの心の成長にも繋がる可能性を直感的に感じたものである。

私は今、建設コンサルタントとして自然環境を保全する仕事に就いている。保全と言っても、何かの環境を積極的に保護したり、あるいは新しい環境を創出するというものではない。どちらかという河川の護岸整備等における環境アセスメントであり、マイナスの影響をできるだけ回避、低減すること、それが難しい場合は代償措置を講じようというものである。

これはこれでとても大切なことであり、対策によってもたらされる生物多様性の維持は、私たち人間にとって必要不可欠なものである。ただし理想をいえば、このようなマイナスをゼロに近づける取り組みだけではなく、ゼロからプラスの価値を生み出していくことも重要であろう。そして、ランドスケープデザインで求められていることも、そのような付加価値の創出だと思っている。

こんな私が今回の執筆の話を受けたとき、真っ先に思っていたのが冒頭で紹介した「川遊びでの子どもの心の変化」である。これまで治水を目的として大人が設計してきた河川の水辺空間が、実は子どもの心を成長させる遊び場にもなっているというものである。このような子ども目線からの付加価値の創出について、幸いにして社内研究の機会を頂いたので、その結果を交えて紹介しようと思う。ランドスケープを本業としていない私の考えではあるが、何かのヒントになれば幸いである。

### 水辺で育む子どもの能力・資質

さて、突然ではあるが皆さんに一つ質問したい。皆さんは、川遊びを体験したことがあるだろうか。別に子どもの頃でなくても構わない。もし経験がないならば、是非、今年の夏は

川遊びを体験してみたい。一日、遊んでみると頭の中のモヤモヤが晴れて、気分がスッキリしていることに気づくだろう。実は私自身も体験したのは専ら大人になってからであるが、日常の鬱々とした気持ちが解消されるという不思議な感覚に見舞われたものである。

そんな経験と会社の後押しもあり、社内研究をスタートさせた。テーマは、水辺遊びは子どもの心にどんな効果をもたらすのか、その効果のためにはどのような水辺空間を創出すればよいのかを明らかにすることである。

なお、扱う水辺は都市部を流れる自然的な中小河川を対象としている。これは、水辺の中にはプールや都市公園内の人工的な循環水路などもあるが、子どもの心を成長させる鍵は自然的水辺にこそあると私が仮説を立てているからである。また、都市部を選んだのは、わざわざ手を加えなくても既に自然豊かな空間が整っている山間地では、水辺づくりの需要は低いだろうと考えたためである。

話を戻すが、本研究の一番の山場はいきなり訪れた。それは子どもの心の変化を如何にして捉えるか、である。敢えてプロセスから書くならば、初めは遊んでいる子どもたちの表情を観察し、そこから感じていることを読み取ろうと考えたのだが、表情に紐づく感情は人それぞれ異なること、また観察する人の主観によって捉え方が変わってしまい上手くいかなかった。そんな中、最終的に辿り着いたのが、発達心理学の分野でしばしば用いられる発話分析方法である。土木工学を専攻してきた私にとっては全くの異分野であり、このコラボは正に目からうろこであった。

発話分析を簡単に紹介すると、扱うデータは子どもたちが



写真-1 子どもが遊ぶ都市部の水辺

発することばであり、その中に含まれる単語や文脈を分析することで心の成長内容を探るというものである。ことばを発するとき、頭の中では間違いなく関連する知識や感覚が浮かんでいる。それらをそのときに初めて経験し身に付けたかと言われるとそれはわからないが、人は過去に学んだことを繰り返し実践することで身に付けるものである。そう考えると、発話が記録された水辺は少なくとも繰り返しによって定着させる場になっていると言えるのである。

前置きが長くなったが結論はこうである。自然的な水辺での遊びでは、「課題解決力」や「創造力」を効率的に身に付けることができるのだ。これは新学習指導要領で謳われている「生きる力」に繋がる力でもあり、とても重要な示唆ではないかと思う。

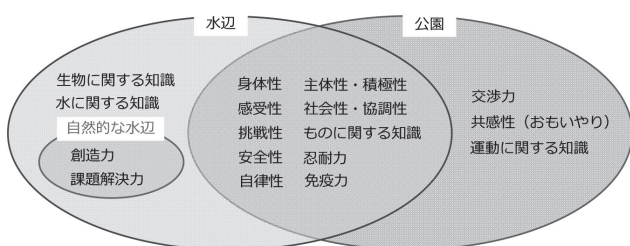


図-1 都市部の水辺で育まれる能力・資質

### 「課題解決力」「創造力」を育むための水辺の姿

もう一つ、これらの力を育むための水辺条件についても簡単に触れておこう。水辺と言っても様々な顔があるのだが、これらの力を育むための水辺とはどういった場所なのか。

結論としては、川の中を自由に移動できることや魚採りの際に水面に被さるような水際植生が連続しているなど、何か課題が生じた際に改善策を考えて選択できるような環境が条件として挙げられた。詳細は研究成果<sup>1)</sup>、及び今春、子どもの水辺研究会から出版予定の書籍を参照されたい。

以上、水辺空間のデザインを例に、子ども目線からの付加価値の創出について論じてきたが、これらは水辺のランドスケープとしてもそのまま使える視点ではないかと思う。



図-2 「生きる力」に必要な水辺環境条件の例

### 水辺遊びで気を付けるべきこと

水辺空間は子どもの心身を成長させられる身近な環境であり是非広めて頂きたいが、普及させる際は必ず気を付けて欲

しいことがある。それは、水難事故への備えである。

水難事故は単なる怪我では済まされず命を落とす危険性が高い。言うまでもないことだとは思いますが、毎年のように水遊びのシーズンになると多数の痛ましいニュースが聞こえてくるので、この場でも敢えて強調しておきたい。

対策方法についても幾つか紹介する。一番難しいのは安全を突き詰めるほど自然体験の刺激が減少する、すなわち子どもの成長という付加価値も減少していくというトレードオフの関係にあることである。そのため、設計時に是非留意したいのは、致命的な事故だけは避けるよう工夫することである。例えば、遊び場の下流側に水深の浅い空間を用意しておけば、仮に流されたとしても足がつくだろう。もう一つは、ハード面の対策だけでは限界があり、ソフト対策との両輪で対応することである。ライフジャケットやリバーシューズ等の必要な装備を着用すること、また整備した水辺空間に大人の見守りを常態化させることを是非徹底して欲しい。大人の見守りは、専属のスタッフでなくても構わない。散歩やサイクリングで訪れる人たちの目でも十分である。そのような大人の見守りが自然と生まれるような散歩道等を、予め一緒にデザインできるといいだろう。

### おわりに

本稿では、水辺空間のデザインを例にとり、付加価値として子どもの心身の育成効果が期待できることを紹介した。子どもたちの健全な育成に貢献できるということはとても興味深いことであり、またデザインに子どもの目線を取り入れるというアプローチも面白い試みであったと思う。

これからのランドスケープデザインにおいても、今回紹介したような自然豊かな水辺空間を取り入れることで大きな付加価値を創出できるかもしれないし、また子どもの目線に着目することで何か新しいものを生み出せるかもしれない。次世代を担う子どもたちの健全な育成に向けて、是非参考にしてみたい。

### 参考文献

- 1) 土井康義ら：水辺を中心とした子どもを育むまちづくりに関する研究，vol.19，国土文化研究所年次報告，2021

#### (略歴)

1979年高知県生まれ。2003年東北大学大学院情報科学研究科博士前期課程修了。技術士（建設部門－建設環境分野）。建設コンサルタントとして、公共事業における環境アセスメントに従事。20代後半の頃、現・公益財団法人河川財団子どもの水辺サポートセンターに2年間在籍し、水辺の魅力や子どもの環境教育に興味を持つ。以来、日常業務の中に環境学習を取り入れ、また業務外でも地元の高校生への環境学習に取り組んでいる。